

アトリエ 琉游舎 だより 167号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2023年12月7日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>



- 柚子の実が最盛期です。栃木県では柑橘類の甘い果実はほとんどできませんが、酸っぱい柚子はたくさん収穫されます。今年は台風もなかったので棘で実が傷つかず、きれいな黄色の柚子をたくさん頂きました。柚子大根、柚子胡椒、柚子ジャム、柚子ポン酢、使い切れないほどの量です。頂き物で恐縮ですが、食べ切れないものはお裾分け、柚子湯にも使います。
- 柚子は実ばかりに目が行きがちですが、柚子の花も可憐な姿で、初夏の季語にもなっています。大きな木になる本柚子に比べて花柚子は低木で実も小さく鉢でも栽培されています。初夏には花を、晩秋には小ぶりの実を、庭木にして楽しんでいる人が増えているようです。
- これから冬至に向かって寒さが厳しくなってきます。冬至はカボチャに柚子湯で風邪を引かないという言い伝えがあります。カボチャも柚子も冬至まで我が家のストックは充分です。
- 柚子坊という言葉を見つけました。アゲハチョウなどの幼虫の俗称です。いわゆる芋虫です。蝶や蛾の幼虫である毛虫と異なり、毛がない幼虫の総称が芋虫です。柚子などの柑橘類の葉を主食にしているから付けられた名前。特にアゲハチョウの幼虫は柑橘類の葉を食べるので柚子坊と呼ばれています。これも俳句の季語となっていて、季節は初秋。
- 近郷ではリンゴの収穫も最盛期です。農家から直接リンゴを購入すると、温暖化で栽培がだんだん難しくなってきたと言う話を聞くようになりました。逆に甘味のある柑橘類の北限もだんだん上がってきて、ここら辺りでも食べられるようになったという話も聞きます。鮭の遡上も今年は少ないようです。自然の変化の中でいち早く生き物は変化に順応しようとしているのです。人もその生き物のひとつ、変化への順応を忘れないことが肝要なはずです。

新年祝祷会 1月1日（月）10時半 琉游舎にて

12月・1月スケジュール			木	金	土	日
			7 映画会 お休み	8	9	10
11	12	13	14 映画会 13時半から	15	16	17
18	19 読書会 13時半から	20	21 映画会 お休み	22	23	24
25	26	27	28 映画会 お休み	29	30	31
1月1日 新年祝祷会 10時半	2	3	4 映画会 お休み	5	6	7 写経会 13時半から

読書会
12月19日
(火) 13時半

写経会
1月7日
(日) 13時半

映画会
12月14日

足尾鉍毒事件のドキュメンタリー映画を見ました。日本の公害の原点と言われる事件です。私の育ったところから車で1時間ほどの場所が足尾です。銅の採掘と精錬で富国強兵の旗頭として明治からの工業化、帝国化を先導したこの場所は、昭和30年代以降の高度成長期に水俣病やイタイイタイ病などの四大公害事件が大きく世間を騒がせた私の成長期に、再び公害の告発と抵抗運動の原点として注目されていました。私の出身県での出来事だったことや、高校の校長が鉍毒事件を明治天皇に直訴しようとした田中正造の研究者で著名であったことの興味だけでなく、正造を主人公とする新劇「明治の枢」や映画「檻樓の旗」を中高生の私が日常的に見られる環境にあったことが私の今の思考を方向づけるひとつになったのかも知れません。現在と比較してオープンに意見を交わし、時に抵抗運動まで起こった昭和の時代は、国家の横暴や企業の不正に真正面から異を唱えるパワーが私たちにはあったことをこのドキュメンタリー映画は思い起こさせました。

今足尾は「足尾に緑を育てる会」の活動によって、かつてのはげ山が、緑の山に生まれ変わろうとしています。死んだ山を再生させようという試みは、着々と実を結んでいるようで、山には徐々に緑が戻ってきています。自然の再生力と人間の共棲への強い思いが結実した大変有意義な事業だともおもわれます。ただ、少し穿った見方をすると、山が再生するにつれてかつての異議申し立てと抵抗の記憶、鉍毒の悲惨な被害の事実認識が徐々に私たちから薄れていってしまうのではないかという懸念も生まれます。自然と人々の生活を破壊した人間の愚行を目の前に草木一本生えない死の山の姿として突きつけられたときに、加害者への怒りと被害者への哀しみを共有することが初めて私たちには可能となるのではないのでしょうか。その時私たちはこの愚行を二度と犯してはならないという誓いと共に、その事実をありのままに繋いで行くことを願うはずで、それが足尾の永遠のいのちを繋ぐことだと考えます。足尾の過去現在未来（已・今・当）を永遠のいのちとしてありのままに繋いで行くためには、どのような方法論を採ることが最善なのか、私には判断がつかねます。足尾の土地のいのちがありのままにあり続けたいという思いが緑の再生なのか、死の山のままだにあることなのか、私たちは足尾の土地の地主神（永遠のいのち）の声を聞き続ける必要があるでしょう。

足尾の山の再生のための植樹を主導した一人が栃木県出身の作家立松和平です。生存当時はテレビの報道番組に出演して足尾の山の再生について語っていたことを記憶しています。記憶から次第に薄れかけていた足尾鉍毒事件を再び平成に呼び起こした立松の行動は、足尾のいのちが今に繋げられている契機になりました。その時の彼の発言を辿ってみると、立松はそれまでの足尾が抵抗と告発の歴史、つまり鉍毒事件への反抗活動だったものから、自然(死の山)と人間(愚行)の再生と共棲の活動へと支点を移したことにあります。足尾の問題はその時「事件」から「環境」へと転換したのです。「事件」は解決されることが期待されます。そのために加害と被害を特定しその罪を明確にしたうえで償い(補償や回復)を実現することが図られます。「事件」の運動化は時間的制約がつきまといます。時間経過と共に、当事者や支援者の減少と脱落、世間の関心の希薄化は免れません。加害者の会社や解決の主導者であるべき国(権力)はその希薄化を企図し補償や回復のコストと事件から派生する反権力・反資本意識を最小化しようと努めるでしょう。一方環境運動は大衆運動化が可能です。加害者も被害者も環境の再生と言う目的に向かって敵と味方(加害と被害)の関係を一度精算することが可能になるからです。死の山の再生と言う目的に賛同する者であれば、この環境運動には誰でも参加できます。いまや「環境」は世界的な課題であり、権力と民衆という利害相反の可能性が高い構図から、国家も国民も共通の敵(環境悪化)を見いだすことで、共闘が可能になったともいえるかもしれません。異議申し立て・抵抗から共闘・共棲へ、足尾鉍毒事件の百数十年に渡る変遷と今とこれからは、私たちが過去から学ぶ人類の智慧を証明してくれるものなのか、それとも同じ過ちと災厄を繰り返す生き物なのか、私は緑の山に再生された山の行く末にまたはげ山の幻影を見てしまう恐れをぬぐい去ることができません。

法華経の教えは「誰もが仏になり得る」という教えです。それはまた「誰もが悪にもなり得る」という教えでもあります。法華経にある十界互具の教えは、衆生は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界の境涯のなかを常に行き来していると言うもの。私たちの存在と境遇は、仏界から地獄界までを包摂しながら生きている生き物なのです。私たちは常に自分が仏になろうと試みながらも、煩惱と欲望にさいなまれながら時には悪魔の所業も厭わない地獄に生きる生き物でもあります。その自覚があつてこそ初めて私たちは悪を回避しようとする日々が可能になるのです。日蓮聖人の言葉に「夫れ浄土と云うも地獄と云うも外には候はずただ我等がむねの間にあり、これをさとるを仏といふこれにまよふを凡夫と云う(上野殿後家尼御返事)」とあります。浄土も地獄も外にあるのではなく、ただ私たちの胸の中にあるのです。このことを悟ることを仏といい迷うことを凡夫というと言われています。悟ることとはありのままに観てありのままに行い、日々を心安らかに迷うことなく過ごすことです。しかし心は外からの働きかけによって曇らされて迷いが生じます。この繰り返しと自覚が「私が生きてここにある」ということなのだと私は考えます。

人は過去に学ぶ智慧を未来に生かすことができるのかと言う問いに対して、仏界と地獄界を日々行き来する仏弟子の私は、未来は過去でも現在でもあると言う法華経の時間観に従い「否」と答えてしまうことでしょう。ただ緑の山とはげ山が行き来する幻影が見えている内はまだ悟りと迷いの間に行き来しているということ、つまり「私は生きてここにある」ということなのです。仏界も地獄界も行き来できない境遇に陥りそうになった発病から一年、いまだに悩み迷い考え行い喜怒哀楽の中に生きることが許されたいのちに合掌。